

## 第 61 回日本赤十字社医学会総会

日本赤十字社診療放射線技師会・日本赤十字社臨床検査技師会 合同シンポジウム 参加報告書

日本赤十字社診療放射線技師会

常任理事 中場 貴紀

### 1. 概要

2025 年 10 月 16 日（木）、第 61 回日本赤十字社医学会総会において、「診療放射線技師会・臨床検査技師会 合同シンポジウム」が開催され、参加したので報告する。

本シンポジウムは、診療放射線技師会として日本赤十字社医学会総会において初めて企画・開催されたシンポジウムであり、臨床検査技師会とのコラボレーションにより実現した点で、非常に意義深い取り組みであった。

### 2. シンポジウム概要

- 日時：2025 年 10 月 16 日（木）14:50～16:20
- 会場：大宮ソニックシティ ビル棟 9 階 906 会議室
- セッション名：「見たい！聞きたい！話したい!! 放科と検査のタスクシフト／シェア  
～進まない理由・進めたからこそ解る課題と問題点～」
- 座長：荒井 一正（日本赤十字社和歌山医療センター 診療放射線技師）  
青木 晋爾（旭川赤十字病院 臨床検査技師）

### 3. 演題および内容の要点

各演題では、タスクシフト／シェア導入の実情、課題、導入後に見えてきた問題点や成果が、診療放射線技師・臨床検査技師・看護師それぞれの立場から報告された。

#### 1) 座長挨拶・趣意説明「メディカルスタッフの協力体制に向けて」

荒井 一正（和歌山医療センター）

メディカルスタッフの協力体制構築の重要性について言及があり、タスクシフト／シェアは単なる業務移管ではなく、相互理解と責任共有が不可欠であることが示された。

#### 2) 日本赤十字社診療放射線技師のタスクシフト・シェアの動向

穂坂 慶高（日本赤十字社医療センター）

放射線部門におけるタスクシフト／シェアの現状と制度的背景、導入にあたっての留意点が報告された。当会の調査結果から見えた課題と今後の方策として、①病院全体での理解促進と体制整備、②緊急時対応と安全管理体制の確立、③マニュアル作成と教育プログラムの標準化、が挙げられた。

#### 3) タスクシェア導入と現場の本音

小野木 千香子（愛知医療センター名古屋第二病院）

告示研修の受講、静脈路確保ワーキンググループの立ち上げ、教育制度の整備など、導入に向けた体制

整備の経緯と、導入後の業務負担の変化について、実際の取り組みを交えた率直な意見が示された。

#### 4) タスクシェア導入後の現状報告と現場の声 ～看護師の立場より～

園田 千加枝（愛知医療センター名古屋第二病院）

看護部門（放射線外来）におけるタスクシェアの効果について、メリット（スループット向上、人員調整の円滑化）およびデメリット（問題発生時の対応遅延、責任の所在の不明確さ）が具体的に提示され、多職種連携の中で生じる課題と効果が報告された。

#### 5) 進まない？進めたい？タスクシフト／シェア

石河 徹也（鳥取赤十字病院）

臨床検査技師の立場から、制度は存在するものの現場で進みにくい要因（人員配置、教育、責任範囲の不明確さ等）が整理された。

#### 6) ソナゾイド造影超音波検査におけるタスクシフト／シェアの実践

中迫 祐平（広島赤十字・原爆病院）

ソナゾイド造影超音波検査を例に、実践的なタスクシフト／シェアの取り組みと成果が紹介された。短所として医師の超音波検査習熟度低下が挙げられた一方、医師の業務負担軽減、臨床検査技師の活躍の場の拡大および地位向上、スループット向上といった長所が示された。

#### 7) フロアディスカッション

参加者からは、施設規模による違い、職種間の役割認識、教育体制の整備などについて活発な意見交換が行われた。

### 4. 参加状況および反響

当日は50名強の参加者があり、放射線・検査部門以外の職種の参加も見られた。

タスクシフト／シェアというテーマを通じて、診療放射線技師会の取り組みを他職種に広くアピールする機会となり、診療放射線技師の役割や専門性を理解してもらう有意義な場であったと考えられる。

### 5. 所感

本シンポジウムを通じて、タスクシフト／シェアは一律に成功するものではなく、施設ごとの事情や職種間の合意形成、継続的な教育・評価が不可欠であることが改めて確認された。診療放射線技師会としても、単なる業務拡大ではなく、医療の質と安全性を担保したうえでの役割分担を意識し、他職種との対話を重ねながら指針や情報共有を進めていく必要性を強く感じた。

本シンポジウムは、診療放射線技師会として日本赤十字社医学会総会において初めて開催された企画であり、臨床検査技師会との連携により実現した点は特筆すべき成果である。本企画を主導・実現された会長をはじめ、関係者のご尽力に深く敬意を表したい。

今後も本シンポジウムのような他職種連携を意識した企画を通じて、診療放射線技師会の存在感と臨床的価値を発信していくことが重要であると考えられる。